



Title	我が国におけるデザイン教育図書
Author(s)	城, 貞男
Citation	デザイン理論. 1963, 2, p. 84-90
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52445
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

我が国におけるデザイン教育図書

城 貞 男

ここにあげる関係書は戦後1954年から1962年までに出版されたものである。デザイン教育の基礎教育部門に属する基礎デザイン、ビジュアル・デザインに関するものを取扱うことにした。個々のデザイン教育書にはデザイン教育の傾向から導きだされた内容や成果が示されているので、デザイン教育の傾向をまとめておくことが、各々の図書の特色をはっきりさせると思う。その傾向をあげると(1)は自然観察による新しい形の形成を主としたもの、(2)は数学的、理論的立場による構成を主としたもの、(3)は戦前出版された川喜田練七郎、武井勝雄共著による「構成教育大系」の流をくむもの、(4)はルドルフ・アルンハイムの造形心理学の立場によるものである。

1954年デザイン教育講座全3巻 造型教育研究会編 美術出版社刊

(1)を主としたもので編集者たちが云っているように、日本の図案教育の父である杉浪非水氏の図案生活50年記念を契機として計画され、刊行されたもので、杉浦氏の主張される自然物の観察から新しい形態を創造する立場によるものである。したがって編集メンバーは東京芸大、女子美大の図案部の面々須藤雅路・新井泉・兼松巖・小池岩太郎・石山彰氏である。その内容は第一巻では新しいフォルムの探求、フォルムの観察、観察から表現えと進んでいく。第二巻は表現から形成へ、さらに形成のエレメント、形成のプリンシップル、形成のテクニックに及んでいる。第三巻ではスタイルの形成、形成のプロセスと発展している。ここでは形成という面からデザイン教育が行はれる

という立場を強調しているが、これだけでデザイン教育が全てであるということにならば誤がおこる。その点について第三巻の末尾に「反響に答える責任を今後に残している」と云っている。

1954年 造形講座全5巻 河出書房刊

- | | |
|------------|-------|
| 1巻 形と色 | 末田利一編 |
| 2巻 機械とデザイン | 山口正城編 |
| 3巻 環境と造形 | 吉阪隆正編 |
| 4巻 服飾と生活 | 新井 泉編 |
| 5巻 手と道具 | 松田義之編 |

『形と色』は(1)の自然の観察と(2)の構成によるものであるが、自然の観察ではフットグラフによる自然形の収集におわり問題を提起しているだけとなっている。形と構成については直線、曲線、立体、空間の構成と豊富な写真を挿入してフォルムの解説をこころみている。『機械とデザイン』は山口氏が一年数ヶ月を費やしてデザインの近代文化における役割、デザインの現代的意義、生産とデザインの結びつきについて解明しようと努められている。機械の登場から機械と人間のかかわり、マス・プロダクションにと展開されている。これらの底を流れている人間の生理的、心理的立場を土台にしてデザインの基礎を考え(4)の造形心理学的立場に立つべきことを提案されている。さらにインダストリアル・デザインの現状から工業生産を、多量生産から現代生活の役割にと及んでいる。山口氏が10数年前すでに今日的問題を考えておられたことは意義深いものである。『環境と造形』は人間をとりまく世界と、造形の要因を詳にし、現代的造形の条件を究明しようとしていますが、問題を提起された恰好で終っている個所が多い。ドレス・デザインのはなばなしさから考えてみると『服飾と生活』は世界の服飾絵巻物としての面白さが見られるが、服飾造形の美にいたらなかったのは残念である。今日は頭が進んで、手のはたらきをわすれている時代ともいえる。『手と道具』は手の

はたらきの真実さを見せつけられ、人間の生命とつながる手のはたらきを強く示している。造形の喩が手のはたらきであり、人間の知恵として発達していることを示されると一般教育や全人教育の方法として手のはたらきを重視したい。

1956年 基礎デザイン 小池岩太郎著 美術出版社刊

月刊リビングデザイン誌に連載された一ヶ年分をまとめられたものである。(2)の構成と(1)の形成を二章に分けてデザインの基本的法則の解説を進め、実習の可能なところえ追い込んでいる。学習を試みる者や基本的なデザインの理解を求めている者にとって恰好の手引き書といえる。さらに学習者のおちいりやすい点を指摘し、注言を挿んでいるところ著者のデザイン教育者としての態度のよさがうかがえる。

1960年 デザインの基礎練習 田中正明・三好二郎著 美術出版社刊

上記『基礎デザイン』の著者が序文を付されているが、小池岩太郎氏の理論を両著者が教育現場で実際に具体化し、実践を積み、その成果を示して学習の資とされたのである。構成(2)と形成(1)の作例によってデザインの考え方や創作の方法を研究していくことを望まれている。作例をスタイルやパターンとして読者がとらえることなく、デザインの創作や本質を研究する手がかりとして捉えられたい。この書は上記の『基礎デザイン』の姉妹書として取扱われるならば意義あると思う。

1955年 造形表現 遠藤教三著 造形芸術研究会刊

20世紀の芸術運動から新しい造形表現を指向し、現代社会に及ぼした史的発達をとき、造形の原則やモデューロールを解説し、造形作品と視覚の関係にもふれている。現代における造形の諸問題を提起されたところに意義はあるが、解明からの発展が見られなかったのは残念である。

1955年 構成教育入門 武井勝雄著 造形芸術研究会刊

著者は昭和6年バウハウスの新しい造形教育に共鳴し、川喜多煉七郎氏と共に

に「構成教育大系」を出版され、心ある教師たちの支持をうけ、その思想はひろく全国各地に普及したが、第二次世界大戦の渦中に捲き込まれてその活動が封じられた。しかし戦後のバウハウス的教育に大きな影響を与え造形教育センターが発足し、普通教育では深く浸透している。旧著より引用され、さらに最近の造形理論を加味して今日の造形教育の考え方へと発展させていく。著者が強く訴えていることは、新しい時代の人間の基礎教育として構成教育は誰にも授けるべきもので、人間の活動本能や表現心理を基盤として、素材を通して本能を解放し、創造活動を起させ、潜在する感覚、情緒を呼びますことによって、人間性の教育を施すことができると言っている。したがって人間の精神につながる生理学・心理学の立場で視覚について解説をすすめ、構成教育の目的や内容・方法をあげ、構成教育と形態心理学の関係を心理学者の説に添って論じている。巻末にバウハウスの歴史と教育内容を細録し、我が国における構成教育の沿革を伝えているところ倒れり尽せりといえる。この書が入門書である以上次代の人たちの力によってさらに充実さるべきことを願うものである。

1957年 構成・デザインの基礎 武藤重典著 造形芸術研究会刊

著者が早くから構成・デザイン教育について研究され、識見の高いことは『構成教育入門』に記されており、高橋正人氏の序文中にも出ている。(3)の構成教育のながれをくむものであるが、原始民族、未開人、幼児・少年の表現活動を注視され、意識の合一性を啓発するための芸術活動の必要性を論じ、全人的教育を目指そうとされている。一方現在生産されている造形作品の一般的性格を究明し、デザインの効用性を詳らかにして、現代社会に視覚的伝達作用を基底とした調和の基本的形成原理をうちたるべきことを強調している。さらにデザイン教育の発生や流を伝え、一般教育における方法と教師の資質を示し、教員養成大学におけるカリキュラムをあげている。デザインの要素・原理・色彩については作品の創作過程を通して指摘し解明しよ

うと心がけている点、著者が熱心な教育実践家であることがうかがえる。

1962年 デザインによる教育 松上 茂著 美術出版社刊

著者が長年にわたってデザイン教育の本質をつきとめ体系づけようと努力されておられることは、松上氏の多くのレポートによても明である。1956年に「デザイン教育の本質と内容系列」を整理充実して「デザインによる教育」を出され現職教育や指導者講習会のテキストとされた。この書は美術教育家のダミコやH・リード「芸術による教育」の精神をふまえてデザイン教育の本質と方法を明確化し、普通教育における学習目標と内容を系統づけ美術教師の手引書たらんとしている。

1960年 造形とは？ 山口正城著 美術出版社刊

この書は1959年月刊「美術手帖」に連載されたもので、著者の急逝3ヶ月後にまとめて刊行されたものである。巻頭に著者は「造形の基本的なものは一体何か」そういうことを明確にしてもらえるのがこの書の本筋である。しかしほとんどが、(4)のアルシハイムの「美術と視知覚」その他の著書によるもので、心理学的立場からの形態研究が主となっているため課題の解答は充分に得られない。著者の云うように課題は我が身にふりかかっているもので、自分自身の力でデザインの基礎理論を具体的に掘り下げるべきである。

1960年 デザインの基礎 山口正城・塙田敢共著 光生館刊

6年の歳月を費して脱稿されに著者山口氏が刊行をみず他界された。広汎にわたる造形の諸問題を山口氏独特の思考力と学理的見地から分類整理し、体系づけられた本書の如きものはおそらく今後にあまり数をみないであろう。造形一般論からはじまりデザイン研究の方法を提示し、形態の分類・系列を詳にし、生理的心理的立場から形態を分析し、美の原理を考察し、形態構成の理念と方法を確立しようとしている。塙田氏は色彩理論を担当し、学理的見地から整然と纏めあげられている。これは著者の尊い教育経験と長年の論究から生れたものである。

1962年 造形の基本と実習 真鍋一男著 美術出版社刊

月刊「美術手帖」1960年から61年に連載されたものを訂正補筆してまとめられたものである。バウハウスや山口正城氏の理論を教育現場に展開して、著者独自の教育方法を発見し、具体化されたものであろう。24項目に渡っての研究課題であるが、各項の作例は『体験を通して把握された実体としての表現』である。このような表現はあて込まれた状態から生れるものではなく、熱意ある教育者としての著者と、意欲に燃えた学生のふれ合によって生れたものと思われる。したがってパターンとして見ることが許されない程新鮮な作例である。少々体系的なまとめが欠けていても、この書ほど教育実践を深めて著作されたものは他に例をみない。

1962年 造形心理学入門 本明寛著 美術出版社刊

心理学者である著者が美術家や美術評論家に接し研究の動機を得られたようである。造形心理学の基本となる『みえ』を主題にして研究されているのであるが、部分的には(4)のアルンハイムの「美術と視知覚」を引用されている。著者はアルンハイムのゲシタルト心理学一本槍の考え方に対する好意をもたず、行動の理論を背景にもちたいと云っている。造形の意義や役割を心の問題としてとらえ「みる」「みえ」と云う現象性の立場と行動空間の立場から論究に及んでいる。わすれられた「心」と「物」の本質をとりもどすには本書に寄らなければならぬのである。

デザインの技法書や月刊誌にふれることはできなかったが下記に2冊の教養書をあげる。

1956年 現代のデザイン 勝見 勝編 河出新書

1961年 デザインとは何か 川添 登著 角川新書

なお一般教育におけるデザイン教育資料としての著書があげられるが紙数の関係で割愛し主な書名をあげておく。

1958年 中学・高校指導書デザイン前編 文部省

1961年	小学校デザイン学習の手びき	文部省
1955年	子どものための構成教育	間所 春著 造形芸術研究会刊
1955年	美術教育講座 構成図案	金子書房刊
1955年	新しいデザイン	高橋正人著 金子書房刊
1956年	色紙と造形	岩崎喜久雄著 日本色彩社刊
1958年	造形教育と構成デザイン	筒井茂他共著 日本文教出版社刊
1958年	良いデザイン（中学の図工）	高橋正人著 築摩書房刊
1958年	色と形（中学工作全集）	斎藤 清著 岩崎書店刊
1958年	材料と構造（中学工作全集）	高山正喜久著 岩崎書店刊
1959年	デザインの表し方（中学工作全集）	松原郁二著 岩崎書店刊
1959年	デザインの基礎と形成	大阪集画堂
1959年	デザインの指導と作品	大阪集画堂
1960年	デザイン教育入門	細田忠三郎著 創元社刊
1961年	デザイン教育全4巻	美術出版社刊
1962年	新しいデザイン教育	教材社刊